

P2M コラム

減り続ける研究費

吉田 邦夫（東京大学名誉教授）

文科省から交付される運営交付金が年々削減されて、大学が悲鳴を上げている。先日の日経紙に山梨大学学長が苦しい現状を赤裸々に告白しているのを読まれた人も多いであろう。人件費を削減するために、停年で空いたポストを埋めずに、停年教授を非常勤で雇い続けざるを得ないという。確かにいずこを見ても特任教授で溢れかえっている。学長は言う「政府の財政が厳しいので協力して欲しいと言われればやむを得ないとも思うが、それなら、どうしてフィリッピンに2兆円もの援助金が出せるのか。納得しがたい。」その通りではないだろうか。

政府は文科省ばかりでなく、経産省や環境省などの研究開発費も見て欲しいという。特に防衛省関連の予算が大きく増額されていて、総額はむしろ増えているという。しかし、この中の防衛関連の予算がくせ者である。ここから、「デュアル・ユース」なる怪しげな言葉が頻出するようになった。研究開発は本来平和利用を謳っていても、その気になれば戦争にも役立つ技術に直ぐに転用出来るデュアルなものであって、平和利用のみの技術などあり得ない。防衛省の予算を貰ってなにが悪いのかという。研究者自身がしっかりしていることが最も大切だということのである。

NHKに「フランケンシュタインの誘惑、科学史・闇の事件簿」という番組がある。科学者フランケンシュタインが怪物を生み出してしまったように、科学が人間に素敵な夢を見させる

一方で残酷な結果を突きつけることになった数々の歴史的な事件を映像で見せる。特にナチが支配した時代、ユダヤ人を使った人体実験は多いが、いずれも戦後になって関係者は知らぬぞんぜぬで押し通し、その実験結果を知りたいアメリカ軍部によって生ぬるい追求で終わっている事実には驚かされる。ロケット開発で知られるホン・ブラウンも「自分のロケット研究は宇宙に行こうという夢の実現の為であり、軍用に使われることは全く知らなかった」とヌケヌケと記者会見で語る場所が出る。ロケットを飛ばすところをヒトラーに見せて、250基の製造予算を貰うところや、敗戦濃厚となったときに資料を纏めて部下と共に米軍に自ら投降したところと併せて報道されるだけに、平和利用という高邁な理想など、生きるためには簡単に捨てて平気で嘘がつけるという姿が生々しく示されて呆れかえる。

そうでなくても私達は、原子力関係者が、電力関係企業の厚い支援の下にいい加減な安全神話を振りまいて来たことにも拘わらず、相変わらず村社会を守り続けていることを知っている。「ヒトラーと物理科学者たち」（岩波、2016.9）を見れば、ナチ支配に抵抗した学者はほんの数名しか居なかったことがわかる。

平和利用に徹することが本当に出来ることなのであるだろうか。皆さんは、この難問に、どのように答えるのであろうか。